

府中町ふるさと歴史散歩

〔第5回〕

旧府中小学校

明治5年8月2日に学制が發布され、教育普及と就学の指針が示されたことにより、藩学校と寺子屋教育が全国的に近代学校の形態へと変わることとなった。府中町の小学校教育はその翌年の明治6年4月に龍仙寺本堂（今の山田一丁目）で読書・習字の授業を生徒数約20数人で行ったのが始まりで、名前は開明舎と言っていた。明治9年、開明舎を十九番小学校と改称して、算術・作文の2科目を加えて授業が行われた。明治11年、辻・砂原（今の本町二丁目・三丁目）に校舎が建てられたが、以後、生徒数の増加により狭くなったため、新入生は龍仙寺で授業をうけていた時期があった。また、明治35年

本町二丁目（今の歴史民俗資料館のところ）に校舎が増築され、「土手の学校」と称し、教室2、職員室1の分校があり、高学年が授業を受けていた。当時は、男女別々の教室で授業が行われ、授業料を払っていた。児童の服装は粗末な木綿の着物で、草履を履いて、勉強道具は風呂敷に包んで通学していた。男の先生は詰襟ボタン付きの服装、女の先生は振袖に紺色の袴、授業台図は茶銅の振鈴、教室正面の台に横1メートル、縦30センチくらいの算盤が置かれ、足踏みオルガンで唱歌を習い、筆記は石筆を使っていた。窓の外に広がる青田や埃宮護曹の森、時折通る乗合バスのラッパの音が聞こえた。体育の時

間は「経免回り」と呼ばれる田園の中のコース（今の本町一丁目・二丁目）を全員がマラソン競技で体力づくりをしていた。

昭和3年、現在の場所に小学校（当時は県内で一番立派な校舎だと言われた。）が建設されるまで同所で授業が行われていた。

長い歴史と伝統を持つ旧府中小学校時代の思い出を今も大切にしている。

府中町文化財保護審議会委員

尾尻 重 己



昭和3年に現在の地へ移転した府中小学校の全景
（菅原守編『芸州府中荘誌』から）



辻・砂原にあった旧府中小学校
（絵：尾尻）



通称「土手の学校」と呼ばれた分校
（絵：尾尻）

問い合わせ

教育委員会生涯学習課

☎ 286-3272

